

閑雅な食欲

療養日記その三

食卓の上に朝日が流れてゐる
どこかで木魚の音がする
読経の聲も微かに聞える
わたくしは食卓の前に
平らな胡座をくんで
暫くはホータイの白い
八ツ手の葉のやうな自分の手をながめる
いつの間にこんなに曲つてしまつたらう
何か不思議な物でも見る心地である
わたくしはその指に

器用に肉フォーク又をつかませる

扨て、と云つた恰好で
食卓の上に眼をそそぐ
今朝の汁の実は茗荷かな
それとも千六本かな

わたくしはまづ野菜のスープをすすする
それから色の良いおしん香をつまむ
熱い湯気のほくほく立ちのぼる
麦のご飯を頬ばりこむ
粒数にして今のひと口は
どのくらゐあつたらうかと考える
わたくしは療養を全たうした

友のことを考へる
療養を全たうしようとしてゐる
自分の行末について考へる
生きること何がなし

嬉しいことだと考へる
死ぬことは生きることだと考へる
食事が済んだら故郷の母へ
手紙を書かうと考へる

考へながらもわたくしの肉又は
まんべんなく食物の上を歩きまわる
「有り難う」とわたくしは心の中で咳く
誰にともなくおろがみたい気持ちで……

九月某日

(昭和十五年「山桜」二月号)